ワット・ウィル・アイ・ビー・ドゥーイング・ゼン？

勝圭央

膨らんだ繊維のマイナスZ軸へ行った、三分の一日後
わたしの瑠璃には灯が映っているだろう
連れ添う岩から太ましい丸にすげ替わったブルーバック
透過する天井を焦がすヘリウムによって
潰れて熟れたトマトが実っているだろう
あるいは、もしかすれば
わたしが入った肉は、まだ沈没し続けているかもしれない
かたさの裏側という地平線
空行く竜の膚（はだえ）から遣わされた水平線へ
不可視の壁との間の不和
生み出された橙を容れ物の表面で嗅ぎながら

骨間に残るミントを噛みながら水平になった、二の三乗時間後
わたしの石英は焼けた酸素と向き合っているだろう
抜け出せない水流に抱かれたルーティン
そこに絡み付いたわだかまりは解けている
しかし、同時に
重ねられてきた巻物は吹き飛ばされ
ささやかな幸福は立ち退かされている
災いは何も弁えない
もしくは、ひょっとしたら、とっくに
世界を捉えるべきわたしの硝子は溶けているかもしれない
羽毛の谷に牽引されて
肌色に温まったエンドロールを見届けながら

熱い稜線に落ちるひとしずくとなっているかもしれない
それは幸運と言えるだろう

歯を整え、布団に沈み込んだ八時間後の保障
それは泥船さえ恐れおののく
わたしが再び世界を捉えたときの
安らぎの居場所は目の前か昨日か
あるいは